第55回日本アルコールアディクション医学会学術総会

演題番号　O7-2

大学新入生を対象とした処方薬・市販薬使用に関する実態調査

菊地　創[1]）富田拓郎[2]）

1）中央大学大学院文学研究科　2）中央大学文学部

本発表において，報告すべきCOIの企業などはありません。

菊地　創（キクチ　ソウ）

- 所属：中央大学大学院文学研究科
- 資格：臨床心理士，公認心理師
- 臨床：精神科病院（依存症専門治療機関），児童相談所などで心理職として従事。

睡眠薬や抗不安薬などの乱用・依存が増加している

- わが国の薬物依存臨床における主たる乱用薬物は，長らく覚せい剤などの違法薬物が代表的であった。ところが，2010年ごろから睡眠薬や抗不安薬などのいわゆる「捕まらない薬物」の乱用・依存が増加し，深刻な問題となっている（e.g. 松本他，2019）。

- 一般住民を対象とした継続的な調査においても鎮痛薬・精神安定薬（抗不安薬）・睡眠薬といった医薬品の習慣的使用者の割合が年々増加していることが報告されている（e.g. 嶋根他，2020）。

大学生の健康管理教育とアディクション問題

- 大学生を対象に健康管理教育（特に初年次教育）として薬物乱用防止に取り組むことの必要性が指摘されている（e.g. 西村他，2016）。
- 覚せい剤や大麻をはじめとする違法薬物やアルコールに関する実態調査が進められている（e.g.芝井他，2019）。
- 一方で，処方薬や市販薬は乱用・依存の問題が顕在化しているにもかかわらず大学生における処方薬・市販薬に関する実態調査はほとんど行われていない。

大学生年代における先行研究と課題

- 看護系学生を対象とした研究（松下他，2018）や一般住民を対象とした調査（e.g. 嶋根他，2020）は行われている。
- 看護系学生を対象とした調査は参加者の9割が女性であった。また，専攻の特性から薬物に関する知識を有していると考えられる。
- 一般住民を対象とした調査は10代，20代という括りで数値が算出されており，高卒の社会人や20代後半の参加者が一定数含まれている。

本研究の目的

- 先行研究の結果は参考となるものの一般大学生における実態は異なる可能性がある。そこで本研究では一般大学生（新入生）を対象に実態調査を行う。

- また，大学生が処方薬・市販薬依存という問題の存在を認識しているのか否かについても検討する。
  - タバコによる心身への影響に関する知識に関しては8～9割の大学生が有している（e.g. 工藤他，2015）一方で，カフェインに関しては5～6割の大学生しか知識を有していない（菊地他，2020）。
  - 物質によってその影響の啓発には差が大きい。

方法（手続き）

- **調査参加者**
  - 関東圏の私立大学1校に在籍する大学1年生866名（男性：346名，女性：510名，不明10名）が調査に参加した。平均年齢18.5歳（*SD*=0.8）。
- **調査手続き**
  - 2019年5月に，初年次教育科目（必修）の受講生に対して，第2著者の担当授業時に調査趣旨を説明した上で，自記式の質問紙調査を実施した。
  - 当該授業の内容は本調査とは無関係であった。
- **倫理的配慮**
  - 第2著者の所属機関における学内倫理委員会による倫理審査の承認を得て実施した。

方法（調査内容）

- **（1）過去１か月以内で使用した処方薬および市販薬**
  - 「鎮痛薬：痛み止め（頭痛，生理痛，関節痛，歯痛を止める薬）や解熱剤（熱冷まし）」，「抗不安薬（精神安定薬）；心を穏やかに安定させる薬」，「睡眠薬：眠りやすくしたり，睡眠中に目覚めにくくしたりするための医薬品」の中から当てはまるものすべてを選択するように教示した。

- **（2）過去１年間での処方薬および市販薬を使用する頻度**
  - 「一度も飲んでいない」，「1年間で数回飲んだ（年間5回）」，「2か月に1回程度飲んだ（年間6～11回）」，「月に１～２回程度飲んだ（年間12～24回）」，「月に数回程度飲んだ（年間25～51回）」，「週に１～２回程度飲んでいる」，「週に３～６回程度飲んでいる」，「ほとんど毎日，飲んでいる」の8件法で回答を求めた。

方法（調査内容）

- **（3）用法用量を超えた使用**
  - 「これまでに，主治医からの指示や用法用量を超えて使用した経験のある薬はありますか」という質問に対して「鎮痛薬」，「抗不安薬（精神安定薬）」，「睡眠薬」の中から当てはまるものすべてを選択するように教示し回答を求めた。

- **（4）処方薬および市販薬依存に関する知識**
  - 「これらの処方薬や市販薬であっても乱用を繰り返すとアルコールや覚せい剤などと同様に依存症になることを知っていましたか」という質問に対して「知っていた」あるいは「知らなかった」の2件法で回答を求めた。

結果

Table1 性別にみた鎮痛薬・抗不安薬・睡眠薬の使用状況（%）

	全体	性別		p-value
		男性	女性	
鎮痛剤				
過去1か月以内の使用	38.2	18.0	51.6	*p*= .00
習慣的使用	2.0	1.5	2.4	n.s.
用法用量を超えた使用	4.9	3.5	5.9	n.s.
抗不安薬				
過去1か月以内の使用	2.0	1.5	2.2	n.s.
習慣的使用	1.2	1.7	0.8	n.s.
用法用量を超えた使用	0.9	0.6	0.2	n.s.
睡眠薬				
過去1か月以内の使用	1.2	1.2	1.2	n.s.
習慣的使用	0.4	0.6	0.2	n.s.
用法用量を超えた使用	0.6	0.6	0.6	n.s.

p-value for chi-square test

n.s.=not significant

結果

- **用法用量を超えた使用の経験がある習慣使用者**
  - 鎮痛薬において0.7%，（男性0.6%，女性0.8%），抗不安薬0.4%（男性0.3%，女性0.4），睡眠薬0.2%（男性0.6%，女性0.0%）であり，いずれも男女差は認められなかった。複数の薬物で習慣的使用者でありかつ用法用量を超えた使用の経験を持つ者いなかった。
- **処方薬および市販薬依存に関する知識**
  - 67.6%（男性63.9%，女性70.2%）が知っていたと回答し，女性の方がその頻度が有意に高い傾向にあった(p=.05)。知識の有無で，いずれの薬物でも過去１か月以内の使用，習慣的使用，用法用量を超えた使用に有無で有意な差は認められなかった。

処方薬・市販薬使用の実態

- 大学新入生の大半が適切に使用している。
- 一般住民を対象とした先行研究の結果と概ね近似した使用率であった（e.g. 嶋根他，2020）
- 鎮痛薬の過去１か月以内の使用率でのみ性差が認められ，女性の方が使用率が高かった。
  - 生理痛に対する使用に加え，鎮痛薬の使用理由としてもっとも多いのが頭痛に対する使用率も女性の方が有意に高い。

処方薬・市販薬に関する知識：予防教育への示唆

- **67.6%の調査参加者が質問に対して知っていたと回答**
  - タバコの害に関しては8～9割の大学生が知っていたと回答しており，知識を有している割合が相対的に少ない（e.g. 工藤他，2015）。
  - 予防教育で扱われる機会が少ない？
- **知識の有無で使用率に有意な差は認められなかった。**
  - 依存の問題を認識していながら過剰に使用してしまっている学生も存在している可能性がある。
  - 予防教育では害を強調するだけでなく，対処スキルおよび相談窓口に関する情報の提供行い，さらには摂取量の節制を希望する学生をサポートするための大学構内で実施可能な支援方法の開発が必要である。

本研究の限界と今後の課題

- 本研究のデータは関東圏の私立大学1校のデータである。
- 今後の研究では具体的な摂取量や，乱用および依存の重症度，診断基準を満たす者の割合を合わせて検討を行っていく必要がある。
- 大学生の処方薬および市販薬使用に関連する課外活動や心理社会的要因（対人関係や使用動機など）を明らかにし，リスク要因および保護要因を明らかにしていく。

ご清聴・ご視聴ありがとうございました。

- 筆頭著者連絡先
  - Email： a11.8ffd@g.chuo-u.ac.jp

- 利益相反開示
  - 申告すべきものなし。